

借用語の促音化：「ボックス」vs.「ボクサー/ボクシング」再考  
大滝靖司（東京外国語大学大学院）

日本語における英語からの借用語には特定の環境で促音化が起こる。一つは原語が語末音節に「短母音＋阻害音」を持つ場合(1)（以下、「語末の促音化」）、もう一つは原語が語中音節に同様の音連続を持つ場合(2)（以下、「語中の促音化」）である。

- (1) *top* /tɑp/ ⇒ トップ *sutoppu*  
*kick* /kɪk/ ⇒ キック *kikku*  
 (2) *happy* /hæpi/ ⇒ ハッピー *happii*  
*lucky* /lʌki/ ⇒ ラッキー *rakkii*  
 (3) *topping* /tɑpɪŋ/ ⇒ トッピング *toppingu*  
*topless* /tɑpləs/ ⇒ トップレス *toppuresu*

このうち「語末の促音化」には語幹(stem)に形態素が後続する語も含まれるとされ(3)、先行研究の多くは形態素境界に言及する制約 ALIGN(stem-R, σ-R)を導入して説明している(北原 1997, Shinohara 2004 など)。つまり、*topping* を語幹 *top* と接尾辞 *-ing* に分析し、「語末の促音化」を語幹末に要求するという説明である。しかし、このような単純な形態素分析では説明できない例外もかなり存在する。

本研究の目的は次の 2 点である。まず、①原語の語幹に後続する形態素の種類によって促音化に与える影響が異なるという事実を示すこと。その上で、②「語末の促音化」と「語中の促音化」を再定義し、借用語における促音化の体系を再考することである。

原語が語末音節に「短母音＋阻害音＋/s, n, l/」という子音連続を持つ場合にも促音化が起こる(4)。また、自由形態素(free morpheme)や *-less*, *-ment*, *-ness* などの子音で始まる拘束形態素(bound morpheme)が後続する場合(5)も同様である。一方で、*-er*, *-ing* などの母音で始まる拘束形態素が後続する場合には起こらない(6)。

- (4) *box* /bɑks/ ⇒ ボックス *bokkusu*  
*hustle* /hʌsl/ ⇒ ハッスル *hassuru*  
 (5) *mixdown* /mɪksdaʊn/ ⇒ ミックスダウン *mikkusudaun*  
*sexless* /seksləs/ ⇒ セックスレス *sekkusuresu*  
 (6) *boxing* /bɑksɪŋ/ ⇒ ボクシング *bokusingu*  
*hustler* /hʌslə/ ⇒ ハスラー *hasuraa*

以上の点から、自由形態素や子音始まりの拘束形態素と異なり、母音始まりの拘束形態素は語幹の促音化を抑制することがわかる。ここで「語末の促音化」と「語中の促音化」を次のように定義することを提案する。

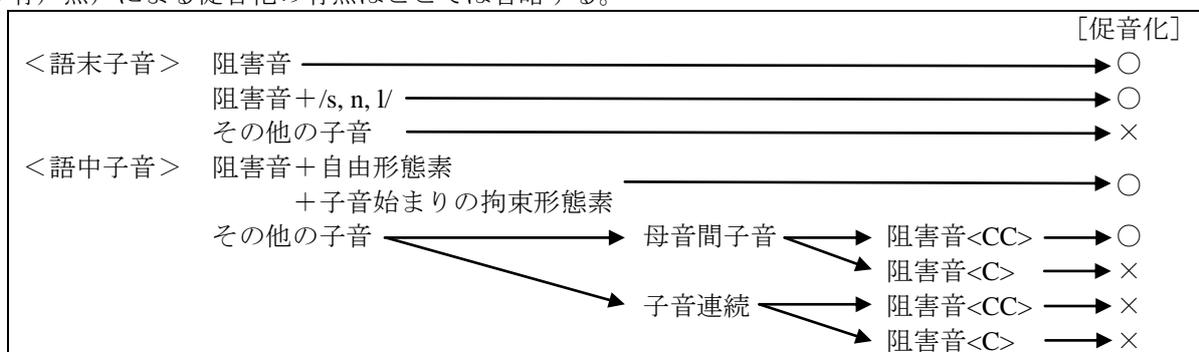
「語末の促音化」：原語の語末における阻害音および阻害音＋/s, n, l/に起こる促音化  
 （子音始まりの拘束形態素が後続する語幹末音節も含む）

「語中の促音化」：原語の語中における阻害音に起こる促音化（子音連続には基本的に起こらない）

この定義に基づいて上記の促音化パターンを改めて見てみると、(4, 5)では「語末の促音化」が起きている一方で、(6)の /-ks-/ や /-sl/ は語中における子音連続とみなされ「語中の促音化」が抑制されていると考えることができる。つまり、(5)の *mixdown* と *sexless* はそれぞれ *mix+down*, *sex+less* の 2 形態素で構成された語と分析されているのに対して、(6)の *boxing* は *-ing* が語幹 *box* との形態素境界を表す役割を果たさず、単一形態素の語とみなされているのである。そのため、促音化を引き起こす環境があっても「語中の促音化」の子音連続と同じように促音化が抑制されていると言える(cf. *cap* キャップ vs. *captain* キャプテン)。 *topping* や *boxing*, *hustler* などにおける母音始まりの拘束形態素に先行する語幹末子音は「語末子音」ではなく「語中子音」と分析されているのである。

大滝(2012)は「語中の促音化」を引き起こす大きな要因として原語の重子音つづり字を挙げているが、*topping* は <pp> を持ち実際に促音化するのに対して、*hustler* は <st> を持つにもかかわらず促音化しない。このことから、阻害音が重子音つづり字であっても子音連続には「語中の促音化」が起きないことを示している。

したがって、借用語における促音化の体系は次のようにまとめることができる。ただし、阻害音の種類および有声無声による促音化の有無はここでは省略する。



参考文献

- 北原真冬 (1997) 「音韻論と文法—借用語の促音とアクセントの分析を通じて」 音声文法研究会(編)『文法と音声』 213-231, くろしお出版。  
 大滝靖司 (2012) 「父称 Mac-/Mc-で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造」 日本言語学会 第 144 回大会予稿集。  
 Shinohara, S. (2004) Emergence of Universal Grammar in foreign word adaptations. In R. Kager et al. (eds.) *Constraints in Phonological Acquisition*, 292-320. Cambridge: Cambridge University Press.